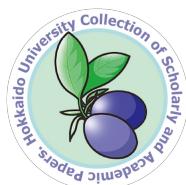




Title	コリャーク語の動詞GE形とイテリメン語のK--KNEN形：形動詞性をめぐる比較
Author(s)	呉人, 恵
Citation	北方言語研究, 7, 1-22
Issue Date	2017-02-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64506
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_kurebito.pdf



コリャーク語の動詞 GE 形とイテリメン語の K--KNEN 形* —形動詞性をめぐる比較—

呉 人 恵
(富山大学)

0. はじめに

コリャーク語 (Koryak: チュクチ・カムチャツカ語族) の非定形動詞のひとつに、「形動詞 (prichastie)」(Zhukova 1972:262) と呼ばれる <ye-/ya-¹+動詞語幹+人称・数接辞> という形式 (以下, 動詞 GE 形と略) がある。この動詞 GE 形の初頭の ye-/ya- は, 共同格接周辞 ye-/ya-..-e/-a/-te/-ta (e.g. ye-gevətqet-e 「妻といっしょに」, ya-jic samjit-a 「兄といっしょに」) の前半要素 ye-/ya- と考えられる。動詞 GE 形は, また, 所有の意味を表す名詞述語と同じ屈折変化をする (e.g. ya-qoja-mojo 「私たちはトナカイを持っている」 vs. ya-ŋvo-mojo 「私たちは始めた」)。

本稿では, この「形動詞」と, 同系とされてきたイテリメン語 (Itelmen) の「形動詞」を比較対照する。イテリメン語の動詞接周辞 k-..-knen/-knin/-knan により形成される形式 (以下, 小野 [2013:137] にならい K--KNEN 形) を比較し, 類似点と相違点を整理する。

チュクチ・カムチャツカ語族のうち, コリャーク語, チュクチ語 (Chukchi), アリュートル語 (Alutor), ケレク語 (Kerek) は高い類似性を示し, その同系性に疑いがないと考えられている (Skorik 1979)。これに対して, イテリメン語は暫定的にこの語族に含まれてはいるものの, その系統的位置づけについては依然, 議論の余地が残されている²。ちなみに, 本稿で扱う動詞 GE 形についても, 前 4 言語には類似の形式がある (ye-piŋku-muju[Kor.], ye-piŋku-muri[Chu.], ye-piŋku-muru[Al.], na³-piŋku-majəkku[Ker.] 「私たちは飛び跳ねた」) (Skorik 1979:244)。一方, イテリメン語では, K--KNEN 形が動詞 GE 形に相当するものとみなされてきた (Bogoras 1922, Stebnitskij 1934, 1936)。当然, この形式上, 類似性が認められない動詞 GE 形と K--KNEN 形⁴が, 実際に統語, 形態, 意味上, どのような対応関係を持つ

* 本稿は, 科学研究費補助金 (基盤研究 C) 「『コリャーク語文法』完成に向けた調査研究—ヴォイス・節構造の諸相を中心に」 (26370480, 代表: 呉人恵) の研究成果のひとつである。コリャーク語の例は, Kurebito (ed.)(2014, 2016) ならびに平成 26 年度から毎年, コリャーク語文法記述のためにおこなってきた現地調査で得られたものである。特に, 平成 28 年 9 月 27 日から 10 月 5 日までハバロフスク市でおこなった調査により, 本稿では呉人 (2017) では記述できていなかった新たなデータを付け加えることができた。調査には Ajatginina Tat'jana Nikolaevna 氏 (1955 年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第 5 トナカイ遊牧ブリガード生まれ, 女性) にコンサルタントとして協力していただいた。ここに記して謝意を表したい。

¹ 2 種類の異形態は母音調和による。コリャーク語の母音調和についての詳細は呉人 (1999) を参照されたい。

² イテリメン語のチュクチ・カムチャツカ語族への帰属に関する賛否両論の概要は, 小野 (2003) に整理されている。

³ ケレク語の /n/ は, チュクチ語, コリャーク語, アリュートル語の /ŋ/ に対応する。

⁴ チュクチ・カムチャツカ語族のうち, イテリメン語以外の言語は相互に語彙的類似性が高いが, イテリメン語とは相違性が大きく, また音韻対応も明確でない。とはいえ, 親族名称において /y/ と /k/ の対応が見られることは, 動詞 GE 形と K--KNEN 形の関係を考えるうえで無視できない (e.g. yəm [Chu.], yəmmə

のかという疑問が生じる。

ところで、コリャーク語の動詞 GE 形については、Stebnitskij (1934, 1936) が「過去形動詞」、Zhukova (1972) が上述のように「形動詞」と呼んでいるにもかかわらず、むしろ主節述語としての機能が強調され、連体修飾語としての機能については言及されてこなかった（アリュートル語やチュクチ語でも同様）。そこで呉人 (2017) は、コリャーク語の動詞 GE 形の形態的・統語的特徴を整理することにより、統語的には「形動詞」と呼びうる特徴を備えているものの、その主たる機能は主節述語としてのそれであること、連体修飾機能も持つが、意味的・形態的制約があること、そして、その制約をいわゆる「動作者名詞」が補完している可能性があることについて考察を加えた。

イテリメン語の K--KNEN 形のこれまでの扱いについても似たような事情がある。すなわち、コリャーク語の動詞 GE 形と対応関係にあるとされていた K--KNEN 形は、Stebnitskij (1934, 1936) などにより、コリャーク語のいわゆる「質形容詞」(Zhukova 1972:146) *n-...qin/-qen* (以下、N 形) に対応するとされてきた K--IN 形とともに「第 3 不定詞 (III infinitiv)」とされ、これまでその主節述語的機能が強調されてきた (Volodin 1976)。これに対し、小野 (2013) は、自身のフィールド調査で得られたデータに基づき、K--KNEN 形が主節述語的機能だけでなく、連体修飾語、補語、名詞としての機能を持ち、形容詞と平行した特徴を示す形動詞的形式であることを明らかにした。

以上のように、コリャーク語の動詞 GE 形、イテリメン語の K--KNEN 形の機能の概要が呉人 (2017)、小野 (2013) によりそれぞれ明らかになっていることから、Bogoras (1922) や Stebnitskij (1934, 1936) が指摘した両形の対応関係に考察を加える条件が整ったといえる。

そこで本稿では、呉人 (2017)、小野 (2013) の記述に依拠しつつ、動詞 GE 形と K--KNEN 形の形態、統語、意味上の対応関係について比較考察を加え、大きく次の 2 点について指摘する。

- A. 両形は、統語的には共通しており、いずれも「形動詞」的な機能を持つ。ただし、主節述語としての機能が主である点では、周辺の他言語の形動詞とはその性格を異にする。
- B. 両形は、名詞語幹からの派生、属性叙述の可否という面で形態的、意味的に重要な相違があり、この相違は、対応関係が指摘されてきた上述の N 形 : K--IN 形とねじれた形で顕現している。

本稿の構成は次のとおりである。まず、第 1 節で、動詞 GE 形と K--KNEN 形がそれぞれ先行研究でどのように扱われてきたかを概観する。第 2 節では、動詞 GE 形の形態的・統語的ふるまいを、小野 (2013) のイテリメン語の記述と平行させて概観する。第 3 節では小野 (2013) にもとづき、K--KNEN 形の形態的・統語的機能を概観する。そして、第 4 節で、形態、意味的に両形とねじれた関係を示すコリャーク語の N 形、イテリメン語の K--IN 形についても概観しつつ、動詞 GE 形と K--KNEN 形の統語、形態、意味の各面での異同を整理

[Al.], *yammo*[Kor.], *kma*[Northern Itel.], *kəma* [Southern Itel.] 「私 (絶対格)」(Kurebito ed. [2001])。

する。

1. 先行研究における扱い

1. 1. 動詞 GE 形

コリヤーク語文法の主要な記述である Zhukova (1972) では、動詞 GE 形は上述の通り「形動詞」とされ、定形動詞に対し、「動詞の名詞的形式 (imennye formy glagola)」(Zhukova 1972:256) のひとつとして、副動詞 (deeprichastie), 不定形 (infinitiv), 目的分詞 (supin) とともにまとめられている。Zhukova (1972) 以前では、Stebnitskij (1934, 1936) は、動詞 GE 形を形動詞としている（ちなみに、副動詞までもが「動詞の名詞的形式」に分類されるのは、動詞の裸語幹に格接辞が付加されて形成されることによる。ただし、このような形式を「副動詞」とすることの是非については、議論の余地がある。本稿では、以下、「副詞節」とする）。

このように、動詞 GE 形はこれまでも「形動詞」あるいは「分詞」とされてきた。しかし、実際には、過去を表す主節述語としての機能に記述の重点が置かれ、形動詞としての主たる機能である連体修飾機能についての記述は、管見の限り見られない。その背景には、後述するように、動詞 GE 形には形態的・統語的・意味的な制約があり、出現率が主節述語に比べて圧倒的に少ないことがあると考えられる。

同系のアリュートル語やチュクチ語にも同様の事情がある。両言語にも動詞 GE 形があるが、その連体修飾機能に関する言及は管見のかぎり見当たらない。ちなみに、動詞 GE 形は、アリュートル語では「結果相」を表わす形式 (Nagayama 2003:110), 「定形動詞の単人称活用形」(Kibrik et al. 2004:253), チュクチ語では「名詞化した動詞の述語形式」(Bogoras 1922:758), 「過去 II (結果相)」(Skorik 1977:35), 「完了相」(Nedjalkov 1994:281), 「動的屈折形式」に対する「静的屈折形式(完了)」(Dunn 1999:191), 「分詞的述語 (participial predicate)」(Malchukov 2013:192) などのように、主節述語としての機能に注目した定義が顕著である。

とはいえ、具体例を詳しく見てみると、連体修飾語として用いられていると思われる例も皆無なわけではない。(1) は、Nagayama (2003) に現れたアリュートル語の連体修飾語としての動詞 GE 形の例である。

- (1) *ya-quql'u-tku-l* *kirkir* *puqjusy-u*
 RES-prodyrjavat'sja-ITR⁵-3sg.s *kombinezon:ABS.sg* *zalez't.do.pojasa-SUFF*
lən-ə-tkə-nin.
 AUX-E-IPF-3sg.A/3sg.P
 「穴だらけのつなぎを着た」 (Nagayama 2003:162)

さらに、アリュートル語では、(2) のように動詞 GE 形は格接辞を伴って、副詞節を形成することがある (Kibrik et al. 2004)。(2) の *y-il-lan-ki* の *-ki* には、「CONV (副動詞)」とい

⁵ Nagayama (2003) の引用例文グロスで示された略語は、便宜的に本稿の略語に従い次のように統一する：ITER→ITR, IMPF→IPF。また、小文字の略語はすべて大文字に統一する (Kibrik et al. [2004] の例文も該当)。

うグロスがつけられているが、実際には *-ki* は場所格接辞である。上述の通り、*ye-/ya-* は共同格接頭辞であるため、これにさらに場所格がつくというのは特異な現象である。ちなみに、コリャーク語にはこのような例は見られない。

- (2) *Qutkinjŋaqu nura.q y-il-laŋ-ki*
Qutkinnaqu+NOM+SG for.a.long.time RES-be-RES+3pl.S-CONV
iv-i:
say-3sg.S+PF

「クトキニャークは長いことしてから、言った」

(Kibrik et al. 2004:17)

以上から、動詞 GE 形の形態的・統語的特徴については、改めて具体例を精査し、過去の定義づけに再検討を加える余地があるといえよう。呉人 (2017) でコリャーク語の動詞 GE 形の形態的・統語的特徴の整理をおこなったのは、そのためである。

1. 2. K-KNEN 形

一方、イテリメン語の K-KNEN 形については、定形動詞に近いものとしてみなす研究者と、形動詞とみなす研究者がいるようである。Volodin (1976) は、K-KNEN 形を形動詞とはとらえておらず、3 人称過去を表わす「第 3 不定詞」⁶としているが、アスペクトや希求の接辞が付加されることから、むしろ定形動詞に近い形式とみている。

Moll (1960) は上述の通り、K-KNEN 形を過去時制の能動形動詞か過去時制の動詞とみている。さらに、上述の通り、小野 (2013) では、K-KNEN 形がテンスやヴォイスを表わす動詞的な機能を部分的に持ちつつも、連体修飾、主節述語、補語としての機能を持つこと、数や稀に格の区別をすることなどの点で、むしろ形容詞の形態統語的ふるまいに類似しているとし、「形動詞」と呼ぶことの妥当性を主張している (K-KNEN 形の形態統語的ふるまいについては第 3 節を参照)。

K-KNEN 形と他言語との対応関係については、Bogoras (1922) がチュクチ語やコリャーク語の *ye-...lin* 形に相当するとしている。また、Stebnitskij (1934, 1936) は、コリャーク語の過去形動詞 *ye-...lin* や、チュクチ語の過去 II (3 人称) の *ye-...lin* に対応するとしている。

2. コリャーク語の動詞 GE 形

本節では、コリャーク語の動詞 GE 形の形態的・統語的・意味的特徴について、呉人 (2017) を踏まえつつ概観する。ただし、イテリメン語の K-KNEN 形との比較のために、小野 (2013) の挙げているいくつかの観点に沿って見ていくことにする。

小野 (2013) は、K-KNEN 形と K-IN 形について、①統語上のふるまい：連体修飾、主節述語、補語、②形態上のふるまい：テンス・アスペクト、数、態、人称、名詞化、格、名詞語幹からの派生などの観点から、その特徴を考察している。

⁶ ここで、「不定詞」と言っているのは、定形動詞に対する非定形動詞の意味であると考えられる。ちなみに、Volodin (1976) では、定形動詞 (*finitnyj glagol*) と対比的に第 3 不定詞 (*III infinitive*) が述べられている (小野 [2013] の注 8 も参照のこと)。

本節では、統語上のふるまいとして、連体修飾、主節述語、補語、さらにこれに加え、K--KNEN 形の統語機能としては挙げられていないが、動詞 GE 形の名詞節述語としての機能の有無についても検討する。次に形態上のふるまいとして、テンス・アスペクト、数、人称、名詞語幹からの派生、格について検討する。

2. 1. 統語的特徴

動詞 GE 形は、連体修飾、主節述語、述語の補語の統語的機能を持つ。この他、名詞節述語の機能を持つ可能性があるが、現時点では断定できないため、例をあげ、断定できない理由について述べておくにとどめる。なお、動詞 GE 形は自動詞、他動詞両方から形成される。

2. 1. 1. 連体修飾

動詞 GE 形は連体修飾機能を持つが、これにはいくつかの制約がある。

まず第一に、修飾可能なのは、絶対格の主要部名詞のみであり、斜格名詞を修飾することはできない。(3)(4) は動詞 GE 形が S を修飾している例、(5)(6) は P を修飾している例である。連体修飾語として用いられる動詞 GE 形には数の区別があり、*ye-/ya-...-lin/-len* (単数), *ye-/ya-...-linet/-lenat* (双数), *ye-/ya-...-linew/-lenaw* (複数) は、それぞれ絶対格単数、絶対格双数、絶対格複数の主要部名詞との一致を示す (3)(5) は絶対格単数、(4) は絶対格双数、(6) は絶対格複数)。なお、グロスでは数のみ表示して SG/DU/PL とする。

- (3) *Wajam-tajn-a-k ko-tva-ŋ-Ø ya-pʃa-len*
 river-shore-E-LOC IPF-exist-IPF-3SG.S GE-dry-SG
n-a-mejəŋ-qin ənnəʔən.
 PRP-E-big-SG fish(ABS.SG)
 「川岸に (1 匹の) 大きな乾いた魚がある」
- (4) *ŋanko ko-tva-ŋ-e ya-cŋal-lenat kojŋ-a-t.*
 there IPF-exist-IPF-3DU.S GE-crack-DU cup-E-ABS.DU
 「あそこに 2 つのひび割れたコップがある」
- (5) *Q-a-jictʃe-Ø ye-qətvī-lin miməl-Ø kojŋ-a-ŋqo.*
 2SG.A.OPT-E-pour-3SG.P GE-get.cold-SG water-ABS.SG cup-E-ABL
 「冷めたお湯をカップに注ぎなさい」
- (6) *Q-a-jet-yənew yəmkəŋ ya-cco-lenaw ənn-u.*
 2SG.A.OPT-E-bring-E-3PL.P 1SG.DAT GE-clean-PL fish-ABS.PL
 「私にさばいた魚 (複数) を持ってきてなさい」

第二に、動詞 GE 形は名詞項や付加詞を伴って連体修飾節を形成することができない (7a)。

代わりに連体修飾節の述語は、「動作者名詞」(Zhukova 1972:137) を形成すると言われる *-lf* という分詞的接尾辞を動詞語幹に付加することにより形成される (7b) (以下、動詞語幹に *-lf* がついて派生される形式を「動詞 LH 形」)。その場合には、名詞項や付加詞は定形動詞と同じ格形式を保持する。

- (7a) **Q-ə-jet-yən* *yəmkəŋ* *kama-ŋa*
 2SG.A.OPT-E-bring-3SG.P 1SG.DAT container-ABS.SG
 ye-tejk-ə-lin *ləyun-e* *ilqəly-in.*
 GE-make-E-SG bark-INS white.birch-REL
 「私に白樺の樹皮で作った容器を持ってきたさい」
- (7b) *Q-ə-jet-yən* *yəmkəŋ* *kama-ŋa*
 2SG.A.OPT-E-bring-E-3SG.P 1SG.DAT container-ABS.SG
 tejk-ə-lf-ə-n *ləyun-e* *ilqəly-in.*
 make-E-LH-E-ABS.SG bark-INS white.birch-REL
 「私に白樺の樹皮で作った容器を持ってきたさい」

動詞 GE 形と動詞 LH 形は、それぞれ単独で主要部名詞を修飾する際には、完了 vs 不完了の意味的対立がある (*ye-qətvī-lin miməl-Ø* 「冷めたお湯」 vs *qəvi-lf-ə-n miməl-Ø* 「冷めかけたお湯」, *ya-cco-len ənnəʔən* 「さばいた魚」 vs *acco-lf-ə-n ənnəʔən* 「さばいている魚」)。しかし、動詞 GE 形が用いられない、名詞項や付加詞を伴った連体修飾節では、この意味的対立は中和されるといえる。

第三に、連体修飾語として用いられる動詞 GE 形には、もうひとつの制約がある。すなわち、筆者の調査では、動作・行為の結果が残存する結果動詞からは動詞 GE 形の連体修飾語が作れるが (8)、継続動詞からは作れない (9)。

- (8) a. *y-itol-lin miməl-Ø* 「沸いたお湯」
 b. *ye-nətyelew-lin miməl-Ø* 「温めたお湯」
 c. *ye-qətvī-lin miməl-Ø* 「冷めたお湯」
 d. *ye-mle-lin uttəʔut* 「折れた木」
 e. *ya-pʃa-len ənnəʔən* 「乾いた魚」
- (9) a. **y-acacyal-len kəmiŋ-ə-n* 「笑った子供」
 b. **ya-tejŋal-len kəmiŋ-ə-n* 「泣いた子供」

一方、後述の通り、主節述語で用いられる場合には、結果動詞のみならず、継続動詞からも動詞 GE 形が形成される。

以上をまとめると、動詞 GE 形の連体修飾語としての使用には、次のような形態的、統語的、意味的制約があると考えられる。

- i) 斜格名詞を修飾できず、絶対格名詞のみを修飾する。
- ii) 名詞項や付加詞を取って連体修飾節を形成することができない。
- iii) 結果を含意する動詞でなければ連体修飾語になれない。

ちなみに、エリシテーションでは連体修飾語としての動詞 GE 形を引き出すことはできるが、実際のテキストなどでの出現率は非常に低く、動詞 GE 形は、主節述語として使われている例がほとんどである。筆者が編纂した語りのテキスト Kurebito(ed.)(2014, 2016) では、動詞 GE 形全 56 例すべてが主節述語として用いられており、連体修飾語として用いられている例は 1 例も見られない。連体修飾語としての出現率の低さは、上のようないくつかの制約と無関係ではないであろう。

以上から、コリャーク語の動詞 GE 形に関しては、Malchukov (2013) がシベリア諸言語の分詞について構想した非定形動詞から定形動詞へのリニューアル、すなわち、動詞化や脱従属化の過程というシナリオは当てはまらない可能性が高い。コリャーク語の動詞 GE 形は、周辺諸言語の形動詞とは異質な性格を持つといえよう。

2. 1. 2. 主節述語

動詞 GE 形は、主節述語としても用いられる。主節述語として用いられる動詞 GE 形は、「過去時制 I」を表わす定形動詞形に対して、「過去時制 II（非証拠性）」を表わす形式とされている (Zhukova 1972:284)。

表 1 に示す動詞 GE 形の屈折パラダイムにもとづき、具体例を見る。この屈折パラダイムは後述する名詞述語の屈折パラダイムと同じであることに注意されたい（以下、「名詞 GE 形」）。後半部分の人称・数標識は、自動詞では S と、他動詞では P と一致する。

表 1 動詞 GE 形の屈折体系

	単数	双数	複数
1 人称	<i>ye-/ya-..-iyəm</i>	<i>ye-/ya-..-muji/-moje</i>	<i>ye-/ya-..-muju/-mojo</i>
2 人称	<i>ye-/ya-..-iyi</i>	<i>ye-/ya-..-tuji/-toje</i>	<i>ye-/ya-..-tuju/-tojo</i>
3 人称	<i>ye-/ya-..-lin/-len</i>	<i>ye-/ya-..-linet/-lenat</i>	<i>ye-/ya-..-linew/-lenaw</i>

(10)(11) は自動詞 GE 形の例である。

- (10) *Qejmen* *velitko-ja-k* *ye-tku-linew* *caj-u.*
 once trade-house-LOC GE-finish-3PL.S tea-ABS.PL
 「あるとき、お店でお茶が売り切れてしまっていた」

- (11) *yəmmo* *ya-qaj-waŋqajat-iyəm.*
 1SG.ABS GE-a.little-open.one's.mouth-1SG.S
 「私は口を開けていた」

(12)(13) は他動詞 GE 形の例である。他動詞 GE 形は P のみと一致し、A の人称・数は標示されない。そのため、(13) のように A は明示されない場合には、コンテキストで知りえない限り、不明ということになる。

- (12) *Cejvəŋe-Ø ənniw-e yuram-ə-na-k*
 Chejvuge-ABS.SG uncle-INS(ERG) Guram-E-AN-LOC(ERG)
ye-nmejŋew-lin.
 GE-bring.up-3SG.P
 「チェイヴゲを叔父のグラムが育てた」

- (13) *Jatan ojpətkocʰ-o ye-jyule-linew.*
 only dog.rose-ABS.PL GE-know-3PL.P
 「野いばらだけを知っていた」

2. 1. 3. 補語

動詞 GE 形が述語の補語になっていると考えられる例も見られる。筆者の調査では、そのような述語動詞としては存在動詞 *tva* 「いる／ある」が不完了形で現れる例が確認されている。後述のイテリメン語 K--KNEN 形は、「なる」を意味する述語動詞の補語にもなりうるようであるが、動詞 GE 形については「なる」と共起する例は確認されていない。

- (14) *Təllətəl ye-weŋe-lin ko-tva-ŋ-Ø.*
 door(ABS.SG) GE-open-3SG.S IPF-be-IPF-3SG.S
 「ドアは開けられていた」
- (15) *Jatan qun amu ənp-ə-qlavol-o kitkit*
 only probably probably old-E-husband-ABS.PL a.tiny.bit
ya-qaj-iwwici⁷-linew ko-tva-la-ŋ-Ø.
 GE-little.bit-drink-3PL.S IPF-be-PL-IPF-3S
 「恐らく老人たちが少し飲んでしまっただけだった」

この 2 例は、行為が完了し、その結果が残存している（あるいは、いた）状態であることを明示していると思われる（(14) ではドアが開けられて、開いている状態、(15) は老人たちが酒を飲んだ結果、ほろ酔いになっている状態）。

とはいえ、この 2 例は、連体修飾の例と解釈される可能性もないわけではない。すなわち、コリャーク語では連体修飾語と主要部名詞の語順は自由でかつ別の語をまたぐことも可能である。(14) は「開けられたドアがある／あった」、(15) は「少し飲んだ老人たちがいる／ただけだった」という解釈も成り立ちうるようにも思われる。ただし、動詞 GE 形は

⁷ *iwwici* は「飲む」を意味する自動詞語幹。対応する他動詞語幹 *lp* 「～を飲む」もある。

連体修飾の場合、上述のように付加詞を伴うことができないため、副詞 *kitkit* 「ちょっと」がある (15) を連体修飾語とすることはできない。

後述するイテリメン語のように K--KNEN 形がコピュラ動詞と共起する場合には、補語としての解釈が有力である。一方、コリヤーク語の場合には、存在動詞 *tva* がコピュラ化しているかどうか判断の鍵となるが、次のように *tva* がコピュラ動詞的に用いられている (16) のような例が見られることから、(14)(15) は動詞 GE 形が補語として用いられている例であると解釈する⁸。

- (16) *ənnə* *ya-tva-len* *catkajoŋ-ʃojamtavelf-o*.
 3SG.ABS GE-exist-3SG.S think-man-ESS
 「彼は思慮深い人だった」

さらに、動詞 GE 形は、名詞節述語であると見られる例も見られる。

- (17) *yəm-nan* *ye-jyule-lin* *el'ʃa-Ø* *ya-kmiŋ-al-lin*.
 1SG-ERG GE-know-3SG.P woman-ABS.SG GE-child-VBL-3SG.S
 「私は女が出産したことを知った」

ただし、(17) の例は、動詞 GE 形の *ya-kmiŋ-al-lin* が *el'ʃa-Ø* を修飾していると解釈し、*ye-jyule-lin* の *-lin* (3SG.P) が名詞節ではなく、*el'ʃa-Ø* に一致しているとも考えることも可能であるため、現時点での断定は控えたい⁹。

2. 2. 形態的特徴

次に、イテリメン語の K--KNEN 形と比較対照するために、動詞 GE 形が主節述語として用いられた場合のいくつかの形態的特徴について見ておく。小野 (2013) では、K--KNEN 形に関するものとして、テンス・アスペクト、人称、数、格、名詞語幹からの形成が考察されているため、動詞 GE 形もこれらについて見ておく。ただし、人称、数については上表 1 に示したため、以下では繰り返さない。

⁸ コピュラ動詞には、*it* がある。動詞の否定形が補語の場合には *it* (母音調和と *ŋ* への同化により *en*)、動詞 GE 形が補語の場合には *tva* が現れる可能性がある。

Ujŋe *meki* *iwwici-ke* *k-en-ŋəvo-ŋ-Ø*.
 not who(ABS.SG) drink-not IPF-be-HAB-IPF-3SG.S
 「誰も酒を飲まない／飲まなかった」

⁹ ちなみに、次の例は動作者名詞 LH 形が疑問代名詞 *miŋkaje* 「どのように」を伴い名詞節述語になっている例である。ここでは、主節述語は 3 人称複数の P との一致を示している。すなわち、名詞節全体ではなく、名詞節内の A あるいは P、さらにはそれと数の一致を示す動詞 LH 形と一致していると考えられる。

Ecyi-kine-w *jeppə* *n-əppul'u-qina-w*, *ewən* *əməŋ*
 now-REL-ABS.PL still PRP-small-3TOP-PL already all
 ye-jyule-linew *miŋkaje* *va-lʃ-o* *ŋajejo* *ʃeq-impl-u*.
 GE-know-3PL.P how be-LH-ABS.PL those(ABS.PL) bad-water-ABS.PL
 「今の人たちはまだ幼いのに皆、あれらウォッカがどんなものか知ってしまっている」

2. 2. 1. テンス・アスペクト・ムード

上述のとおり、動詞 GE 形は、「過去時制 II」として、非目撃性を表わすとされている (Zhukova 1972)。たしかに、自分たちの体験や風俗習慣について語るコリャーク語のテキスト¹⁰には、動詞 GE 形はあまり出現しない。一方、民話のように自分たちが実際に経験していない事柄について語る際には、動詞 GE 形の出現率が高くなることは、テキストから容易に観察される¹¹。しかしながら、非目撃性についても過去についても反証となりうる例がある。たとえば、1 人称が S として現れる (18) や、P として現れる (19) のような例では、動詞 GE 形は非目撃性を表わすとはいえない。

- (18) *Ewən ye-mejŋ-et-ə-yəm.*
already GE-big-VBL-E-1SG.S
「私はもう成長していた」

- (19) *Emŋuqun muju qonpəŋ ya-pela-mojo.*
therefore 1PL.ABS always GE-leave-1PL.P
「だから私たちをいつも残したのだ」

また、動詞 GE 形には「過去」ではなく、現在の状態を表わす例 (20) も見られる。(20) では時間副詞 *ecyi* 「今」が用いられていることに注目されたい。

- (20) *Ecyi kitkit mət-ko-wel-al-la-ŋ, ewən*
now a.tiny.bit 1PL.S-IPF-wet-VBL-PL-IPF already
ya-ŋvo-mojo cawjiŋ-cij-ə-k.
GE-begin-1PL.S cough-INT-E-INF
「今では、私たちは濡れるとすぐに咳き込み始めてしまっている」

さらに、(21) では未来の出来事について、動詞 GE 形が用いられている。

- (21) *Ekilu ya-tonval-len, j-it-ə-ŋ-Ø*
if GE-come.into.being-3SG.S FUT-be-E-FUT-3SG.S
n-ə-mel-qin-Ø jalyət-yiŋ-ə-n acci
PRP-E-good-3TOP-SG move-VBL-E-ABS.SG and

¹⁰ そのようなテキストには、定形動詞の「過去 I」ではなく、不完了非未来の *ku-/ko...-ŋ* が頻出する。下例は、語り手が昔のことを回想しながら語っている場面である。

Wujv-ə-k ko-tva-la-ŋ-Ø velitko-ja-n. ŋakaje mət-ko-qleva-ŋta-ŋvo-la-ŋ.
village-E-LOC IPF-exist-PL-IPF-3S trade-house-ABS.SG there 1PL.S-IPF-bread-go.for-HAB-PL-IPF
「村には何軒かの木造の家や 1 軒の店があった。そこに私たちはパンを買いに行ったものだ。」

¹¹ ちなみに、イテリメン語の民話の地の文でも、主節述語はもう一つの形動詞 K-IN 形とともに、K-KNEN 形で現れる場合が多いようである (小野 2013)。

jamkece-yiq-a-n.

visit-VBL-E-ABS.SG

「もし（きれいな輪が）できあがったら、移動したりお客に行ったりするのはいいだろう」¹²

以上から、動詞 GE 形は時制ではなく、アスペクト、具体的には結果残存を表わす完了相の一種と考える方が妥当ではないかとも考えられる。ちなみに、Nedjalkov (1994) は、チュクチ語の動詞 GE 形と定形動詞のいわゆる「過去 II」を、それぞれ perfect と aorist としている。アリユートル語については Kibrik et al. (2004), Nagayama (2003) いずれも結果相とみている。Kibrik et al. (2004) では、結果相に加え、間接証拠性の意味が認められる場合もあるとしている。

とはいえ、主節述語として用いられる動詞 GE 形の意味についての筆者の考察は未だ十分ではなく、今後、動詞屈折体系の他の形式との関係も考慮に入れながら検討しなければならないため、本稿ではこれ以上は踏み込まない。

なお、後述のように、イテリメン語では K--KNEN 形が恒常的な性質を表す属性叙述機能を持つ (35) のような例が挙げられているが (小野 2013)、動詞 GE 形には属性叙述機能はない。

2. 2. 2. 格

動詞 GE 形は、上述の通り、共同格の前半要素 *ye-/ya-* から形成されていると考えられる。そのため、コリャーク語では、動詞 GE 形にさらに格接辞が付加された例が見られないのは不思議ではない。しかし、同系のアリユートル語では動詞 GE 形に場所格 *-ki* がついた *ya--laŋ-ki* という形式が「副動詞」として報告されている (Kibrik et al. 2004:264)。具体例は (2) で見た通りである。

- (22) *Qutkinjjaqu* *nura.q* *y-il-laŋ-ki*
Qutkinnaqu+NOM+SG *for.a.long.time* *RES-be-RES+3pl.S-CONV*
iv-i:
say-3sg.S+PF

「クトキニャークは長いことしてから、言った」 (=2) (Kibrik et al. 2004:17)

2. 2. 3. 名詞 GE 形

GE 形は名詞語幹からも作られ、所有の意味を表す (呉人 2017)。上表 1 で見た動詞 GE 形と同じ屈折形式を持ち、連体修飾語としても主節述語としても用いられる。一方、イテリメン語では、名詞語幹から K--KNEN 形を作ることはできない (小野 2013)。

(23)(24) は主節述語としての名詞 GE 形の例である。(25)(26) は連体修飾語としての例で

¹² 草を何本か結んで占う草占いのことに関する語りに現れた文である。「(きれいな輪が)できあがったら」というのは結んだ草が絡まったりせずに輪になったことを意味している。

ある。連体修飾語として用いられる場合には、主要部名詞の人称・数と一致する。

- (23) *Ewən van ənn'aq ya-qoja-mojo.*
 already probably now GE-reindeer-1PL.S
 「私たちにはすでにトナカイがいる」
- (24) *Tənuṗ-kəlvəlq-u ʕopta ye-miml-ə-linew.*
 mountain-base-ABS.PL also GE-water-E-3PL.S
 「山の麓（複数）もまた水がある」
- (25) *ḡanko ko-tva-ḡ-Ø ya-wəww-ə-len tənuṗ-Ø.*
 there IPF-be-IPF-3SG.S GE-stone-E-SG hill-ABS.SG
 「あそこに石だらけの丘がある」
- (26) *Q-ə-yite ḡ-utt-ə-lin tənuṗ-Ø.*
 2SG.A.OPT-E-look.at GE-wood-E-SG hill-ABS.SG
 「木の多い丘を見なさい」

ただし、名詞 GE 形にも動詞 GE 形同様、絶対格の主要部名詞しか修飾できないという制約がある。

さらに、(27) のように名詞節述語と考える例も見られるが、連体修飾と解釈できないこともなく、確実に名詞節述語であるとの判断は現時点ではできない。

- (27) *ḡəm-nan ye-jyule-lin el'ʕa-Ø ya-kmiḡ-ə-lin.*
 1SG-ERG GE-know-3SG.P woman-ABS.SG GE-child-E-3SG
 ?「私は女が子持ちだと知った」? 「私は子持ちの女を知った」

3. イテリメン語の K--KNEN 形

本節では、上でコリャーク語の動詞 GE 形について見た統語的特徴、形態的特徴がイテリメン語の K--KNEN 形ではどうなっているのかを小野 (2013) にもとづき見る。

コリャーク語の動詞 GE 形は、＜共同格前部要素＋動詞語幹＋人称・数標識＞という構造を持つ。一方、イテリメン語の K--KNEN 形の K- は随格の *k-/x-..com* の前部要素に相当すると考えられなくもない¹³。ただし、コリャーク語の N 形に相当するといわれるもうひとつの形動詞 K--IN 形も前部要素に *k-* を有しており、K--KNEN 形も K--IN 形も随格の前部要素を持つとすると、コリャーク語との対応関係が成立しないことになってしまう。また、動詞 GE 形では人称・数標識が接尾されているのに対し、K--KNEN 形の後半要素 -KNEN は

¹³ ちなみに、他の 4 言語で随格はそれぞれ、*ḡ(a)-ḡawən-..ma* [Kor.], *ḡa-..ma* [Ch.], *ḡawən-..ma* [Al.], *n(a)-..(ə)ma* [Ker.] で現れる。

人称・数標識ではない。

3. 1. 統語的特徴

K--KNEN 形には、連体修飾、主節述語、主節述語の補語としての機能が確認されている（小野 2013）。なお、K--KNEN 形は、自動詞ならびに一部の他動詞（Ⅱ類）からのみ形成される。

3. 1. 1. 連体修飾

(28)(29) は、連体修飾語としての例である。小野 (2013) で挙げられている K--KNEN 形は、動詞語幹 *k'əsxɬ* 「乾く」、*qjo* 「冷める」から形成されている。この 2 例だけから断定することはできないが、イテリメン語でも連体修飾語になれるのが結果動詞からなる K--KNEN 形に限定される可能性がある。また、この 2 例とも絶対格名詞を修飾しており、斜格を修飾している例は見えない。以上から K--KNEN 形にも動詞 GE 形同様、連体修飾語としての出現に制約がある可能性がある。ただし、(29)(30) の例に見られるように、K--KNEN 形は副詞 *qaʔta* 「すでに」、*li* 「とても」と共起している点で、動詞 GE 形とは異なる。なお、以下の例は特に言及しないかぎり小野(2013) からの引用である。小野 (2013) では該当箇所の下線が引かれてあるが、本稿ではコリヤーク語の例の挙げ方と統一して、下線は省略し、イタリックにする。ただし、グロスの付し方等は原文のままである。

- (28) *iʔlu-nk* *zolo-z-in* *plax* *k-k'əsxɬ-knin*
 岸-LOC 横たわる-PRES-3SG 大きい.SG.ABS K-乾く-KNEN
nənc.
 魚.SG.ABS
 「岸に大きな乾いた魚が横たわっている」 (小野 2013:143)

- (29) *enu* *iʔ* *xmelja-ʔan,* *qaʔta* *k-qjo-knin,*
 この 水.ABS ホップ-MDF すでに K-冷める-KNIN
n-insat-es-cen *kwəʃonka-nk.*
 PASS-流す-PRES-PASS>3SG 樽-ALL
 「すでに冷めたこのホップ水、(その水が) 樽に注がれる」 (小野 2013:143)

- (30) *na* *li* *k'-wetat-knin* *jimsx.*
 3SG.ABS とても K-働く-KNEN 女.SG.ABS
 「彼女はとてもよく働く女だ」 (小野 2013:145)

3. 1. 2. 主節述語

(31)(32) は主節述語の例である。小野 (2013) によれば、遠い過去および間接話法を表わす主節述語としての K--KNEN 形は K--IN 形とともに民話の地の文に頻出する。遠い過去あるいは間接話法であるかはさておき、民話に頻出する点は動詞 GE 形と共通している。

- (31) *ememqut uxt-ank k-piki-knin.*
 エメムクト.ABS 森-ALL K-行く-KNEN
 「エメムクトは森へ行った」 (小野 2013:143)

- (32) *k-ank-knen mem ek kist.*¹⁴
 K-見つける-KNEN 夏小屋.SG.ABS と 家.SG.ABS
 「彼／彼女は夏小屋と家を見つけた」 (荒木 1988:637)

3. 1. 3. 主節述語の補語

(33)(34) は主節述語の補語の例である。K--KNEN は、コピュラ動詞 *!*「である」(33) 以外に、*le*「なる」(34) の補語になることができる。

- (33) *məzin c'amzanɣ ɭi k'-wetat-knin ɭ-qzu-Ø-in.*
 1PL.POSS 人間.SG.ABS とても K-働く-KNEN である-DUR-PST-3SG
 「私たちの人間 (=イテリメン) はとてもよく働く (者) だった」
 (小野 2013:138)

- (34) *knin ɣic ɭi k'-wetat-knin le-Ø-in.*
 2SG.POSS 妻.SG.ABS とても K-働く-KNEN なる-PST-3SG
 「おまえの妻はとてもよく働くようになった」 (小野 2013:144)

なお、以上3つの機能の実際のテキストでの出現率については、小野 (2013) では言及されていないが、Worth (1961) のイテリメン語のテキストを見るかぎり、主節述語で使われている例が圧倒的に多い。

3. 2. 形態的特徴

3. 2. 1. テンス・アスペクト

小野 (2013) によれば、K--KNEN 形は、過去形として訳されることが多いが、上述の(30)(33)(34) や下例(35) のように属性叙述にも用いられることがある。

- (35) *ɭi k-k'enezi-knen k-ɭ-qzu-knen.*
 とても K-考える-KNEN K-である-DUR-KNEN
 「(彼は) とてもよく考える (人) だった」 (小野 2013:144)

¹⁴ 荒木 (1988:637) では次のように例とグロスが挙げられているが、ここでは小野 (2013) に従ってグロスを付した。

k-ank-Ø-Ø-knen mem-Ø-Ø ek kist-Ø-Ø. (*k~knen* 3 人称単数主語・過去, *ank* 語根「見つける」,
-Ø-Ø 過去完了, *mem* 語根「夏小屋」, *-Ø-Ø* 絶対格・単数, *ek* 接続詞「〜と」, *kist* 「家」,
-Ø-Ø 絶対格・単数)

一方、コリャーク語の動詞 GE 形は恒常的な属性叙述はしない。コリャーク語で属性叙述をおこなうのは、むしろイテリメン語の K--IN 形に対応するといわれる N 形である（詳細は 4.3.1 を参照のこと）

3. 2. 2. 人称

動詞 GE 形は、上述のように語尾に人称・数標識を持ち、自動詞の場合には S，他動詞の場合には P との一致を明示するのに対し、K--KNEN 形は、人称・数標識がない点が異なる。従来は、K--KNEN 形は 3 人称の S, P を表わすとされてきたが (Volodin 1976)，1 人称，2 人称でも用いられることが小野 (2013) によって明らかにされている。

3. 2. 3. 格

小野 (2013) によれば、K--KNEN 形は、まれに具格を伴って出現する。ただし、この場合には、アリュートル語の動詞 GE 形が場所格を取って副詞節を形成するのとはふるまいが異なる。すなわち、名詞化された K--KNEN 形が具格を取ったものと考えられる¹⁵。(36) では、*txi*「夜を明かす」から作られた K--KNEN 形が「夜を明かした (もの)」と名詞化し、それにさらに具格が付加されたとされている。

- (36) *Qelxnu k-txi-knen-l nu-qaz-at-c?*
 本当に K-夜を明かす-KNEN-INS 食べる-DUR-FUT-2SG
 「本当に夜を明かしたのもの (昨日の残りもの) を食べるの？」
 (Worth 1961:244)

3. 2. 4. 名詞語幹からの派生

動詞 GE 形が名詞語幹からも形成され、所有の意味を表すことは 2.2.3 で述べた通りである。これに対し、K--KNEN 形は名詞語幹から形成できない。代わりにイテリメン語では、名詞語幹は K--IN 形と結びつき、「～が (たくさん) ある」という意味を表す（詳細は 4.3.2 を参照のこと）。一方、コリャーク語で K--IN 形に対応する N 形は、形容詞語幹，動詞語幹，名詞語幹，副詞語幹から形成されるが、名詞語幹から形成される場合，所有を表わすわけではなく，当該事物の属性や現象が顕著であることを表わす（詳細は 4.3.1 を参照のこと）。

4. 考察

以上，動詞 GE 形と K--KNEN 形の統語ならびに形態的特徴を見てきたが，本節では，これらの特徴について両形を比較考察し，その異同を明らかにする。表 2 は，両形の統語ならびに形態的特徴の有無などについて示したものである。小野 (2013) では，K--KNEN 形を名詞，形容詞，定形動詞と比較することにより，形容詞とのふるまい，機能の類似性を浮かびあがらせている。これらを含めた動詞 GE 形と K--KNEN 形の比較は今後の課題とし，

¹⁵ ちなみに，*k-txlote-knen*「老婆」のように，K--KNEN 形が名詞化した例も他に挙げられている（小野 2013:146）。

ここでは動詞 GE 形と K--KNEN 形のみに絞り、これまで見てきた諸特徴をまとめる。

表 2 動詞 GE 形と K--KNEN 形の比較

		動詞 GE 形	K--KNEN 形
統語的特徴	連体修飾	○	○
	主節述語	○	○
	補語	○	○
	名詞節述語	?	?
形態的特徴 (主節述語)	格	×	△
	数	○	○
	人称	○	×
	TAM	過去? 結果残存	過去 属性叙述
名詞語幹からの派生		○	×

4. 1. 統語面での比較

まず、統語面について、表 2 で示されている動詞 GE 形と K--KNEN 形の異同に加え、これまでの考察により明らかになった両形の異同を洗い出して整理する。まず、共通点は以下のとおりである。

【共通点】

- ①両形とも連体修飾語に加え、主節述語、述語の補語としての機能を有する。その意味では、「形動詞」的特徴を有するといえる。
- ②両形とも、このうち主節述語としての機能が優勢である。
- ③連体修飾では、K--KNEN 形も動詞 GE 形同様、結果動詞から形成される可能性がある。
- ④両形とも、絶対格の名詞のみ修飾する。

一方、相違点は以下のとおりである。

【相違点】

- ①連体修飾の場合、動詞 GE 形は名詞項や付加詞を伴って連体修飾節を形成することができるが、K--KNEN 形は *qa?ta* 「すでに」、*li* 「とても」などの副詞を取ることができる。ただし、名詞項を取ることができるかどうかは、現時点では不明である。

なお、名詞節述語機能の有無については、今後、考察を深める必要がある。

4. 2. 形態・意味面での比較

次に形態・意味の面での両形の異同について整理する。まず、共通点は以下のとおりである。

【共通点】

- ①両形とも数の標示がある（ただし、動詞 GE 形は単数・双数・複数、K--KNEN 形は単数・複数という違いがある）。
- ②両形とも一般的には過去の出来事を表わす。

一方、相違点は次のとおりである。

【相違点】

- ①動詞 GE 形は、過去というより結果残存の完了相を表わすとみなした方がよい可能性がある。
- ②K--KNEN 形は、属性叙述をおこなうが、コリャーク語では属性叙述は動詞 GE 形ではなく、N 形がおこなう。
- ③主節述語として用いられる場合、動詞 GE 形は S あるいは P の人称・数との一致を示すが、K--KNEN 形では示されず、S あるいは P として自立的に現れる名詞項を手掛かりとするしかない。
- ④GE 形は名詞語幹からも形成され、所有の意味を表すが、K--KNEN 形は名詞語幹からは形成されない。イテリメン語で名詞語幹から形成され、所有の意味を表すのは形動詞は K--IN である。

以上の両形の統語的・形態的・意味的異同の洗い出しから、次の大きな特徴が浮かび上がる。

- (A) 統語的機能は基本的に共通している。
- (B) 形態的、意味的には、Bogoras (1922)やStebnitskij (1934, 1936)が主張するような動詞 GE形とK--KNEN 形、N形とK--IN 形の対応関係は必ずしもなく、名詞語幹から派生して所有の意味を表す点、属性叙述をおこなう点ではねじれの関係が見られる(表3)。

表3 GE形とK--KNEN形のねじれの関係

所有(名詞語幹)	属性叙述
GE形 K--IN形	N形 K--KNEN 形

以上から、動詞GE形とK--KNEN 形は、統語的な共通性は見せつつも、形態的、意味的には必ずしも対応していないことがわかる。

4. 3. N 形と K--IN 形の統語・形態・意味面での特徴

4. 3. 1. N 形

本稿では詳しく触れなかったが、最後にコリャーク語の属性叙述専用形式 N 形と K--IN 形の対応についても概観し、今後これらの形式も包括した両言語の「形動詞」の比較考察の基礎作りをしておきたい。

コリャーク語の N 形については、呉人 (2010) で詳述しているが、伝統文法では、「質形容詞 (kachestvennye prilagatel'nye)」(Zhukova 1972:146) とされ、形容詞に分類されてきた。しかし、実際には形容詞語幹専用の形式ではなく、名詞、副詞、動詞語幹からも生産的に派生される属性叙述専用形式である (37)。名詞語幹から派生される N 形は、上述のとおり、名詞 GE 形とは異なり、所有を表わすわけではない (37a)。

(37) a. 名詞語幹

<i>n-ə-qejaly-ə-qen</i> 「寒い」	← <i>qejaly-ə-n</i> 「凍寒」
<i>n-ə-caca-qen</i> 「美味しい」	← <i>caca-n</i> 「味」
<i>n-ə-ktey-qen</i> 「風が強い」	← <i>kətey-Ø</i> 「風」
<i>n-ə-pijkəl-qin</i> 「蒸し暑い」	← <i>pijkəl-Ø</i> 「蒸し暑さ」
<i>n-ə-ɲikəl-qen</i> 「恥ずかしがりだ」	← <i>ɲikəl-Ø</i> 「恥」
<i>n-ə-muqe-qin</i> 「雨がちだ」	← <i>muqe-muq</i> 「雨」
<i>n-ə-jəŋa-qin</i> 「霧がちだ」	← <i>jəŋa-jəŋ</i> 「霧」

b. 形容詞語幹

n-ə-mejəŋ-qin 「大きい」, *n-əppl'u-qin* 「小さい」, *n-ə-qi-qin* 「厚い」, *n-ə-vəl'ɣ-ə-qen* 「薄い」, *n-iwl-ə-qin* 「長い」, *n-ikm-ə-qin* 「短い」

c. 副詞語幹

<i>n-ə-manəŋ-qen</i> 「まばらだ」	← <i>manəŋ</i> 「まばらに」
<i>n-inʃe-qin</i> 「早い」	← <i>inʃe</i> 「早く」
<i>n-ə-teʃi-qin</i> 「少しだ」	← <i>teʃi</i> 「少し」
<i>n-ə-juleq-qin</i> 「(時間的に) 長い」	← <i>juleq</i> 「(時間的に) 長く」

d. 動詞語幹

<i>n-ə-jiŋe-qin</i> 「飛ぶ」	← <i>jiŋe-k</i> 「飛ぶ」
<i>n-ə-palomtel-qen</i> 「注意深い」	← <i>palomtel-ə-k</i> 「注意深く聞く」
<i>n-ə-ʃaqatke-qen</i> 「臭い」	← <i>ʃaqatke-k</i> 「臭いにおいがする」
<i>n-ə-nu-qin</i> 「食べられる」	← <i>ju-kkə</i> 「食べる」

N 形は(38) のように連体修飾語として用いられる他, 主節述語 (39), 述語の補語 (40) としても用いられる。連体修飾の場合, 被修飾名詞は絶対格でしか現れない。

- (38) *Wuccin n-ə-mejəŋ-qin jaja-ŋa.*
 this PRP-E-big-3SG house-ABS.SG
 「これは大きい家だ」

- (39) *Jaja-ŋa jəqqəŋ n-ə-mejəŋ-qin-Ø.*
 house-ABS.SG very PRP-E-big-3TOP-SG
 「家はとても大きい」

- (40) *Mucyinew ʃojacek-o ya-tva-lenaw n-el'yevet-qena-w.*
 our(ABS.PL) guy-ABS.PL RES-be-3PL.S PRP-hardworking-3TOP-PL
 「私たちの男たちは働き者だった」

動詞語幹から派生される場合, 自動詞では S に (41), 他動詞では P に (42) 一致する。

- (41) *ənnə unmək n-ewji-qin-Ø.*
 3SG.S very.much PRP-eat-3TOP-SG
 「彼は（恒常的に）よく食べる」
- (42) *Wuccin wala-Ø n-ə-java-qen-Ø.*
 this knife-ABS.SG PRP-E-use-3TOP-SG
 「このナイフはよく使える」

属性叙述の N 形に対して、N 形と同じ語幹から形成される不完了非未来の動詞屈折形式 *ku-/ko-...-ŋ*（略して、KU 形）は、一時的状態を表わす事象叙述の機能を担う。(43a) は、N 形、(43b) は対応する KU 形である。

- (43)a. *ənnə unmək n-ə-ŋot-qen-Ø.*
 3SG.ABS very PRP-E-angry-3TOP-SG
 「彼／彼女は（恒常的に）とても怒りっぽい」
- b. *Ecɣi ənnə unmək ko-ŋot-at-ə-ŋ-Ø.*
 now 3SG.ABS very IPF-angry-VBL-E-IPF-3SG.S
 「今、彼／彼女がとても怒っている」

4. 3. 2. K--IN 形

イテリメン語の K--IN 形も N 形同様、連体修飾語 (44)、主節述語 (45)、述語の補語 (46) として用いられる。

- (44) *tinu əŋqsχ-ʔin k-sk-ʔan oromx.*
 これ 白樺の皮-MDF K-作る-IN 容器.SG.ABS
 「これは白樺の皮から作られた容器だ」 (小野 2013:138)
- (45) *nieniek'e-cχ laxsx-enk k'-ənzolŋa-ʔan.*
 子供-DIM.SG.ABS 母-SG.LOC K-寝かせる-IN
 「子供が母に寝かされた」 (小野 2013:145)
- (46) *nuc k'-ənli-ʔin t-qzu-Ø-in.*
 扉.SG.ABS K-～を開く-IN である-DUR-PST-3SG
 「扉は開けられた（状態）だった」 (小野 2013:144)

K--IN 形は、過去時制の被動形動詞とされ (Moll 1960)、動詞語幹から形成される場合には、通常、(44)(45)(46) のように過去を表わすようである。少なくとも、小野 (2013) で見る限り、過去以外、たとえば属性叙述で用いられている例はない。

さらに、K--IN 形は、名詞語幹から派生され、「～が（たくさん）ある」という所有の意

味を表わす (47)。ちなみに、小野 (2013) はコリヤーク語の名詞 GE 形が同様の意味を表わすと指摘している。

(47)a. *tin* *li* *k'-nənc-ʔin* *kij*.
 これ とても K-魚-IN 川.SG.ABS
 「これはとても魚が多い川だ」

b. *tin* *kij* *li* *k'-nənc-ʔin*.
 これ 川 とても K-魚-IN
 「この川はとても魚が多い」

(小野 2013:151)

以上から、コリヤーク語の N 形とイテリメン語の K-IN 形の対応関係は、次のようにまとめられる。

- (a) 統語的機能は基本的に共通している。
- (b) いずれも名詞語幹からも派生されるが、K-IN はむしろ名詞 GE 形と同じ、所有の意味を表わす。
- (c) K-IN 形は通常、過去を表わすし、N 形が表わす属性叙述の機能は持たないと考えられる。

5. おわりに

本稿では、コリヤーク語の動詞 GE 形とイテリメン語の K--KNEN 形の従来、指摘されてきた対応関係について、統語、形態、意味の面から再検討を加えた。その結果、両形は統語的には共通しているが、形態的には、GE 形はイテリメン語のもうひとつの形動詞形 K--IN 形と、意味的には K--KNEN 形はコリヤーク語の属性叙述形式 N 形と対応している可能性が浮かび上がってきた。したがって、今後はイテリメン語で K--KNEN 形、K--IN 形と統語的、形態的にふるまいが共通している形容詞も視野に入れつつ、これらすべての形式をより総合的に比較し、その異同について整理していくことが課題となる。

【略語表】

A=agent-like argument	ABL = ablative	ABS = absolutive
ALL=allative	COM=comitative	DAT=dative
DU=dual	DUR=durative	E=epenthetic
ERG=ergative	ESS=essive	FUT=future
GE= <i>ye-/ya-</i>	HAB=habitual	INF=infinitive
INS=instrumental	INT=intensifier	IPF=imperfective
ITR=iterative	LH=- <i>lʃ</i>	LOC=locative
MDF=modifier	OPT=optative	P=patient-like argument
PASS=passive	PF=perfective	PL=plural

POSS=possessive	PRES=present	PRP=property predication
PST=past	REL=relational	S=single argument
SG=singular	VBL=verbalizer	

【参考文献】

- 荒木浩 (1988) 「イテリメン語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典第 1 巻 世界言語編上』 633-638. 東京：三省堂.
- Bogoras, Waldemar (1922) *Chukchee*. In F. Boas (ed.) *Handbook of American Indian Languages*. Part 2, *Bureau of American Ethnology, Bulletin* 40: 631-903. Washington D.C.: Smithsonian Institution.
- Dunn, Michael John (1999) *A Grammar of Chukchi*. A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy of Australian National University.
- Kibrik, A. E., Kodzasov, S. V. and Muravyova, I. A. (2004) *Language and Folklore of the Alutor People*. ELPR Publication Series A2-042. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- 呉人恵 (1999) 「チュクチ・カムチャツカ語族の母音調和に関する一考察」 『富山大学人文学部紀要』 30: 49-64.
- 呉人恵 (2010) 「コリヤーク語の属性叙述 ―主題化のメカニズムを中心に」 『言語研究』 138: 115-147.
- 呉人恵 (2017) 「コリヤーク語の「形動詞」の機能 ―「動作者名詞」との比較を通して―」 『北方人文研究』 10.
- Kurebito, Megumi (ed.) (2001) *Comparative Basic Vocabulary of the Chukchee-Kamchatkan Language Family: 1*, ELPR Publication Series A2-011.
- Kurebito, Megumi (ed.) (2014) *Koryak Text 1*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, Megumi (ed.) (2016) *Koryak Text 2*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Malchukov, Andrej (2013) Verbalization and Insubordination in Siberian Languages. In Martine Robberts and Hubert Cuyckens (eds.) *Shared Grammaticalization: with Special Focus on the Transeurasian Languages*, 177-208. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Moll, T. A. (1960) Ocherk fonetiki i morfologii sedankinskogo dialekta itelmenskogo jazyka. *Uchenie zapiski*, 193-222. Leningrad.
- Nagayama, Yukari (2003) *Ocherk grammatiki aljutorskogo jazyka*. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Nedjalkov, Vladimir (1994) Tense-aspect-mood Forms in Chukchi. *Sprachtypologie und Universalienforschung* 47 (4): 278-354.
- 小野智香子 (2003) 「カムチャツカの自然とともに生きる ―イテリメン」 津曲敏郎 (編著) 『北のことばフィールド・ノート [18 の言語と文化]』 119-134. 札幌：北海道大学図書刊行会.

- 小野智香子 (2013) 「イテリメン語の形動詞に関する考察」 『北方言語研究』 3:137-154.
- Skorik, P. Ja. (1977) *Grammatika chukotskogo jazyka*. ch. II, Leningrad.
- Skorik, P. Ja. (1979) Chukotsko-kamchatskie jazyki. *Jazyki Azii i Afriki. Paleoaziatskie jazyki*, 230-263. Moskva: Izdatel'stvo Nauka.
- Stebnitskij, S. N. (1934) Itel'menskij (kamchadal'skij) jazyk. *Jazyki i pis'mennost' narodov Severa*, ch. III: 85-104. Moskva-Leningrad.
- Stebnitskij, S. N. (1936) *Materialy po itel'menskomu jazyku*. Lingvisticheskij fakul'tet Leningradskogo instituta filologii, literatury i istorii.
- Volodin, A. P. (1976) *Itel'menskij Jazyk*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.
- Worth, Dean S. (1961) *Kamchadal Texts collected by W. Jochelson*. Mouton & Co.: 'S-Gravenhage.
- Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika korjaskogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

Comparison between Koryak Verbal *GE* Form and Itelmen *K--KNEN* Form Regarding “Participle-ness”

Megumi KUREBITO
(University of Toyama)

Koryak and Itelmen have been considered, tentatively, to belong to the same genealogical group, the Chukchi-Kamchatkan language family. Previous studies have argued that the Koryak participle “verbal *GE* form” (*ye-/ya-*) corresponds to the Itelmen participle “*K--KNEN* form” (*k-.-knen/-knin/-knan*). However, few studies have made this argument in detail. The present study clarifies the similarities and dissimilarities between the two forms from syntactic and morphological perspectives.

The results of the comparison of the two forms are as follows:

- 1) Syntactically, both forms shares common features: both can be used as an attributive, a predicate in the main clause, or a complement.
- 2) Both forms show several morphological dissimilarities in number and person marking. Both also differ from each other in that the *K--KNEN* form is used for property predication while the verbal *GE* form is not, and in that the verbal *GE* form probably originated from the nominal *GE* form denoting possession, while the *K--KNEN* form cannot be traced back to the nominal origin.

Underlying factors for the common syntactic functions shared by the two forms of different origins and morphologically different behaviors remain to be investigated in the future.

(くれびと・めぐみ kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp)